



毎月十五日発行 所大社 宗像 定価 一年送料共 1000円

神具・装束 株式会社 井筒 福岡店 福岡市博多区東公園二丁目二番八号

節分祭 齋行

春を呼ぶ 「鬼は外・福は内」



二月三日(月)、当社恒例の節分祭が祈願殿に於て執行された。当日は、前日迄雨が降り、続いた影響で曇天となり、時折小雨が降りそそいだ。祭典中はその雨も止み祈願殿は、年男をはじめ氏子崇敬者、玄海幼稚園児等で一杯となった。

次は宮司、続いて年男、年女代表の占部真太郎氏、西川芳美氏、出光氏子々々長以下宗像郡内の知名士玄海幼稚園児童が次々に玉串を捧げ各平成九年の厄除開運を祈願し祈念した。その後、祈願殿正面の石舞台上に、左右、手に分かれた神鏡、巫弓、華矢、桃矢をたずさえて両端に進み、一各は東北、一各は西南の方向に向い天空、地上を二度射つて邪気を払い清める「鳴弦の儀」が執行行われた。

鳴弦の儀終了後、「豆打ち式」が始まり、太田権宮司の先導により「鬼は外、福は内」と第一声をかける。この節分行事は、宮中に於いて十一月晦日の行事であったが、室町時代以降には、節分の日に行われ

新春の一月十三日、午前十時より、恒例の献米奉告祭が氏子崇敬者多数参列のもと、厳肅裡に執行された。献米奉告祭は、宗像郡市内の氏子の皆様より奉納頂いた新米を神前にお供えし、昨午春の大祭に五穀豊穡を祈念、宗像大神の御神徳賜りて、秋には五穀を豊かに与えられたと神恩に感謝するお祭であると共に、新年の五穀豊穡、無病息災、家内安全を祈念申し上げる祭典である。

献米奉告祭 齋行

祭典にのぞまれた。祭典は定刻、養父宮司、奉斎使以下神職、参列者定座に着席、宮司の祝詞奏上にて、奉斎使が神恩感謝の奉斎詞を奏上、当社巫女による神楽舞奉納の後、宮司、氏子代表、参列者代表が玉串拝礼を行い、敬虔表を捧げ、祭典は滞りなく終了した。

当日晴天に恵まれ、出光氏子代表を始め、遠近より多くの氏子崇敬者が参集した。この祭典は春秋の大祭と同様に氏子会の代表が奉斎使として奉仕する。本年は津屋崎町在住の西野清市氏が選出され、前日より当社齋館にて齋泊、心身を当

め祭典にのぞまれた。祭典は定刻、養父宮司、奉斎使以下神職、参列者定座に着席、宮司の祝詞奏上にて、奉斎使が神恩感謝の奉斎詞を奏上、当社巫女による神楽舞奉納の後、宮司、氏子代表、参列者代表が玉串拝礼を行い、敬虔表を捧げ、祭典は滞りなく終了した。

納頂いた献米は、本年間の日供祭(毎朝神饌として神前にお供えする)

御 札 節分祭齋行に際しましては、ご崇敬の皆様より心かななる御協賛を賜り厚く御礼申し上げます。

宗像大社社務所 各位 併せて皆様方の御挨拶を祈念申し上げます。

津屋崎 佐々木和彦 電灯のあるさまとに光をり黒茶の観葉の素木に

自由ヶ丘 細川輝子 夕光に輝く紅葉の樹下にして 蟬鳴ひとつ死して動かす

この双方が同化し現在の節分祭の形式となり全国の社寺で齋行されている。祭典終了後、清明殿にて直会が催され、参列者一同和やかな一刻を過ごし、節分祭の諸行事は無事終了した。

一方、中津宮でも同時刻に大島村の人々が集り、節分祭が齋行され、楽しい一時を過ごした。

「土」と「土」の間に点(二)を書き入れますと「幸」という字になります。私たちが家を出て行つては家に帰らなくてはならず、この行つた来たり出来るのが「幸」であり「不幸せな人」なのです。

田久井上 光 七十歳の吾が挑戦と元日に 検定受験を孫らに明かす

福間 池浦千鶴子 初詣での土産は餅ときめて みて匂いと温みを感じて 帰る

原町 八波 五月 今朝またも落ちたる仔雀拾ひ 上げタオルに巻きて娘があたためる

今までを振り返って「自分はなんで不幸せな人だらう」と思ひ感じた方々はいませんか。 さて、「幸」(さち)とあ

名古屋 小田 喜一 かもめにも賢慮ありやと船客の撒く餅に争ふさまを見つめて

武丸 中村さつき 書き初めは心経なり大歳に 逝きたる叔母の柩に入れむと

河東 薄 かねる 転がりし葉の中の一粒が窺ふやうに止まりたりけり

田野 森 つるの い寝しまま夫が艶刺る電気音そばに聴き取り便利と思ふ

土穴 瀧口 敦子 薫を焼く匂ひ漂ふ山間に 翁はひたすら畑を耕す



第四二八回 宗像大社歌会詠草

大野 展 男 選 毎月末日、切

宗像大社歌会
俳句作品集 四〇六

声 福間 森 清
北吹けば葦にこもれる鳥の
自由ヶ丘 細川 桐子
山茶や雨にたたかれ石の
上 津屋崎 井浦 良介
初荷藪載り出の苗家の愛
日ノ里 花田いつ枝
廟はみん観音散る紅葉
その誠神みそなわす初詣で
福間中央 山下しづえ
夢櫻様ハゼの葉赤く秋行き
ぬ

一月 福間 森 清
御燈明初冠置の遠嶺かな
自由ヶ丘 細川 桐子
元朝や清く見ゆる庭の景
清新の世にてあれかし丑の
年 東郷 吉武 湧泉
東郷 中野 きみ
神苑は社殿にて神無月

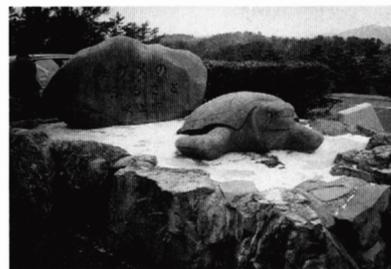
東郷 吉田 鈴子
針目荒し繕ひし老のもの
べはく 東郷 吉田 鈴子
降り続く雪に寝けし地も天
も 東郷 三浦 三三子
波頭淡く光りて小春風
東郷 有吉 紀子
小春日 拉大鏡出す豆引
東郷 田中 雨葉
正確な時計小春の無人駅
淡雪や瀾るる灯し漁師
町 日ノ里 花田いつ枝
孫の教添ゆるお守り初荷と
す 藤沢 井上 玄洋
かよわげの日に光る福寿

(続) 浜の寄物

113

いししいただし

平成八年は蛇の大量漂着
で新年を迎えたが、今年
は重油の漂着だった。ロシア
船タンカー、ナホトカ号が
日本海に沈没、風と大荒れ
の天候が重なり最悪の状態
となった。流出した重油は
海流と風で拡散した。それ
に二つに割れた船体の、船
首の部分は福井県三国町の
海岸に寄せられ、液状の重
油が直接漂着するようになった。
重油回収の作業は難行
だった。陸から堰堤(仮設
道路)をつくり、船首を固
定して重油を抜きとる作業
も進行して進められたが、
陸からの仮設道路が完成し
た時には、海
側からの油抜
取りは終わり、
三十数億を投
入した仮設道
路は無用の長
物化となって
しまった。
四面環海の
日本にあって
タンカー事故
重油流出は十
分予想された
事であったが
、今回も起つて



鹿兒島吹上浜

見なければ分らないとい
う。後手後手の政府対応であ
った。大阪神大震災での市民
のボランティア活動は、経
験が生かされ対応も早かつ
た。今後、深く沈んだもう一
つ船体からの重油の流出が
考えられる。沿岸を襲つた
重油は沿岸の漁業や、海岸
の動植物の生態が著しく
損われている。一月二四日
には、新潟市の陶山修氏か
ら、海亀や水鳥の被害状況
がファックスで届いたが深
刻な問題である。残そう。
漂着・漂流ではないが、
中国からの密航が激増して
いる。一月から二月はじめ
の僅か一月間で三〇〇名の
密航があった。発見
されたのは氷山の一角とす
れば、実数はどれだけの数

にのぼるか。正式の入国
ではないので、結局は食う
に困って犯罪に結びつき、
凶悪犯罪も多発している。
今月一月から二月はじめ
にひいて、山陰と鹿兒島吹
上海岸のいたるところに密
航に対する注意・警戒が呼
びかけられた。看板が多く目
についた。最近ではさびしい
海岸を狙って上陸すること
よりも、堂々と港から上陸
するケースも多い。ただ今
のころロシア船、密航船
ではないが、や中国の密航
船はどれも結構古い老朽船
で、一目で分かるようだ。
漂着物の傾向としても、
中国製品の漂着が随分多く
目につくようになった。以
前は中国製おもちゃ、漁
具類が主であったが、この
数年生計用品や食品関係の
種類も豊富である。漂着の
場合、中国製おもちゃがあつた
が、それが対等になるか、
そのくはである。中国の
経済発展も伺われる。
さて今年一月、二十数年
ぶりに鹿兒島県・吹上海岸
を歩いた。この吹上海岸は
たほど、その過つた処置は
博多を中心し平戸・長崎・
対馬に波及し、宗像にも
そのとばりがあり、宗像の
怪談を生んだのである。
宗像には生活に困らない
裕福な家でも、修業のため
郡外に身置家に入居する
年間に起つた博多の豪商伊
藤小左衛門一族の惨劇の波
紋が津屋崎の縁起屋に及んで
網元長兵衛の娘お露が夜暗
玄海に身を投じて出来事、
その発端から経緯を語つて
みよ。時の藩主は名君と
称される黒田光之で、晩年
になって彼をして「余の治
世中に三つの悔がある。そ
の最も大きい一つは伊藤一
族の処刑である」と嘆かせ



遠賀郡岡垣浜

たところはなかった。この
海岸は五月、六月にアカウ
ミガメの産卵地として知ら
れている。平成八年に産卵
のために陸上には、一
二頭が確認されている。
産卵地として、こまかい配
慮もされている。雄大な砂
丘と松林は景観おこしと
して活用されているが、自
然を損わないように、配慮
されている。(これについ
ては次回で述べる)

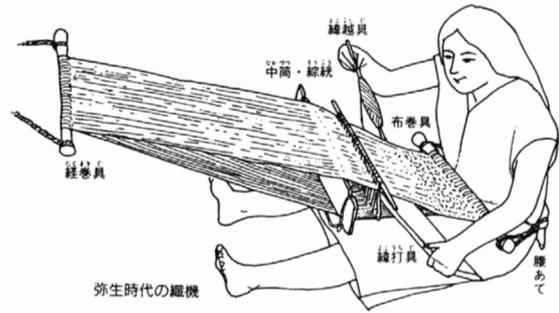
宗像むかしばなし
玄海の一ツ火(上)

この物語は、玄界灘の広
い海岸に開けられた津屋
崎・博多・長崎・平戸等の
港まに勝る港話をつつ
たのである。
古くか伝わる習俗の中
に「一ツ火を嫌う」とい
うことがあるが、それは遠く神代
の昔にイナギ・イナギの
二神の故事に起つてい
るものである。すなわ
ち、古事記によれば女神の
死霊が、女神恋慕のあま
り幽界を訪ねた男神を迎え
た一ツ火が甚だ縁起が悪く

た。ある年番頭の茂七
が平戸の店のみかじめと
して移ることに、彼は
主人の妻女にお露を連れ
てきた。お露は、お露は
手元から手離したくなかつ
たが、老齢の番頭の願いを
許したのである。
お露はやがて起るむごた
らしい主家の悲劇に想う筈
もなく茂七の家族と共に博
多をあとにした。これがや
さしい妻女をはじめ、親し
い同僚との水の別れ、な
らぬ夢に思慕を覚えてい
た。平戸の店も奮奮して
忙しかったが、彼女はこ
うでも皆から可愛がられて平
の身の上は決して口に出さ
なかつた。
つづく

「一ツ火を嫌う」とい
うことがあるが、それは遠く神代
の昔にイナギ・イナギの
二神の故事に起つてい
るものである。すなわ
ち、古事記によれば女神の
死霊が、女神恋慕のあま
り幽界を訪ねた男神を迎え
た一ツ火が甚だ縁起が悪く

「布を織る機」
「天照大神が
機屋(おや
で)自づから衣
の布を織られ
た」といふこと
は、今も伊勢
神宮の祭の一
つ「神御祭」
として現われ
ている。この
こととして
も、やはり人々
の生活の中で
一番に身近で
あり、一番重
大な作業でも
あつたと言え
る。
布を織る機
械(はた)を構造か
ら「原始機(けんしはた)」「高機
(たかはた)」の二種類に大
別する。一方
これらの織機は、原始機より
足踏式で、足踏式は、足踏
跡から出た土器や、土器か
ら、孤や筵を織る織機(む
しろはた)技法の布の庄痕と
も言われている。
原始機は、開口具、綜統
(そうごう) (糸系)にて
これら一、二、三〇〇年



弥生時代の織機

前の時期、即ち縄文時代後
晩期から弥生時代の初期に
かけて、すでに小道具を用
いて、布の生産活動が行わ
れてきたに似ていた。
紡績は太凡が弥生時代に
稲作農耕と同時に知られ出
したとも言われている。
織機としての基本をなす
原始機は、一方の紐を柱や
樹木に縛り付け、対向する
一方の端は織る人本人が着
けている腰當
てに留め付け
る。開口具を
手に持ち、緯糸
を上下させ、
その間に緯糸
を渡し、大形
の刀打(とう
じよ) (渡し
し)緯糸を叩き
布を平面化す
るための道具
で打つ。こ
れの繰り返
しである。こ
れが布作りの原
始的な動作で
ある。
この方法は
各地遺跡から
農耕具と同時
に出土してき
ている紡績具
の組み合わせにより推定さ
れる機織工作の技法である。
紡績具の中でも糸を紡ぐ
ための道具、石製、金属製と
多種多量に出土してきて
いる。この出土の差違、
やはり織る事より紡ぐ方
に、多くの時間と労力を消
費していたことを知らせて
いる。(松)

故郷の神楽

(58)